

西南戦争における火力戦 —田原坂攻防戦を中心に—

軍事史学会理事・日本大学教授

浅川 道夫

1、田原坂攻防戦の位置づけ

(1) 戦略的な意義

征討軍…熊本城救援に向かう南進ルート上の要害

西郷軍…限られた兵力で防禦し得る要衝

(2) 攻防の戦術的位相

征討軍…田原坂を含む台地を、周囲の低地から包囲する形での外線作戦

砲兵火力の優位…弾着観測のための高地確保の必要

台地上に設けられた西郷軍の防備把握の必要

※台地全体を制圧して南進ルートを完全に確保することが作戦目的

西郷軍…台地上に掩堡を構築し、敵の攻撃点に随時兵力を集中させる内戦作戦

台地上の高地を確保…敵の動静把握が容易

白兵衝撃力の優位…近接戦闘により火力の不足を補完

※持久して敵の南進ルートを脅かすことにより作戦目的を継続

(3) 田原坂攻防戦の経緯

西郷軍の熊本城攻撃 (2月22～23日)

征討軍の博多上陸と南進 (2月22日～)

西郷軍主力の北上 (2月24日～)

高瀬付近の戦闘 (2月25～27日)

西郷軍の防勢移転 (2月28日～)

田原坂攻防戦 (3月4～20日)

2、西郷軍の防御陣地

(1) 記録に見る陣地の状況

五十歩に一堡壘、百歩に一胸壁を築き、互いに斜射・側射して援護

地を掘って交通壕を作り、悉く「穴居の状」をなす

塹壕を前に穿ち、木材を削り尖鋭錐のごとし

(2) 掩堡の構築

小銃弾の侵徹力に抗し、よく兵卒の体軀を掩蔽し、攻撃に転ずるの妨げにならず、構

造簡易迅速を貴ぶ

(3) 掩堡の結構

簡易な壕と堆土による胸墻から成り、土を詰めた米俵などで銃眼を補強したもの

堡壘堆土を被覆するため、堡籃・編條などを用いる

堡籃…蔓状の樹枝などで作った無底の丸籠に土を詰めたもの

編條…樹枝などを利用した編組物

鹿柴…樹木を切り倒して枝を削ってとがらせた副防禦

3、田原坂攻防戦で使用された小銃

(1) 前装施条銃

- ・エンフィールド銃 (P1853・1860 Enfield Rifle)

口径0・577インチ、紙薬包式の弾薬と外火式の雷管を使用

征討軍は準用銃として多用、西郷軍でも盛んに使用した

(2) 後装単発銃

- ・スナイドル銃 (P1867 Snider-Enfield Rifle)

口径0・577インチ、弾頭・薬莖・装薬・雷管が一体となったボクサー実包を使用

征討軍・西郷軍双方の主力小銃

- ・アルビニー銃 (Albini Branendlin Rifle)

口径0・577インチ、ボクサー実包をスナイドル銃と共用

主に征討軍が使用

- ・シャープス騎銃 (Sharps Single-shot Percussion Carbine)

口径0・52インチ、可燃式弾薬包と外火式の雷管を使用

征討軍・西郷軍の双方で使用

- ・レカルツ騎銃 (Westley Richards Breech-loader Carbine)

口径0・451インチ、可燃式弾薬包と外火式の雷管を使用

主に征討軍が使用

(3) 連発銃

スペンサー騎銃 (Spencer Repeating Carbine)

口径0・52インチもしくは0・50インチ、ヘリ打ち式の金属薬筒を使用

主に征討軍が使用

4、火力戦の実相

(1) 征討軍の戦法

明治9年仮制式の『歩兵操典』(1874年版フランス歩兵教練書の翻訳)

小銃火力によって敵を制圧→敵戦力の低下・崩壊→銃剣突撃

鎮台兵の白兵衝撃力未熟…小銃の乱射(弾薬の大量消費)

※四斤砲による支援射撃…西郷軍陣地との高低差・雨天による視界不良で効果不十分

(2) 西郷軍の戦法

幕末以来のイギリス式を基本とするが、独自の戦力運用が可能

弾薬の供給が十分でないため、日本刀を用いた接近格闘を多用

※挙兵時の携行弾薬は約 150 万発(鹿児島集成館では日産 3 千発)

(3) 戦局の推移

征討軍…火力を駆使し、低地から高地への攻撃を繰り返すが敵塁を抜けない

西郷軍…高地から戦況を俯瞰し、征討軍の攻撃点に兵力を集中して防禦

戦線の膠着…台地上を俯瞰できる要点(横平山山頂)の攻防が激化

※征討軍による横平山確保…戦局の打開につながる

5、まとめ—総括報告書の作成に向けて

- ・面としての戦場遺跡の把握の必要性…地点ごとに行われる発掘調査の連関性把握
- ・文書史料との照合…戦闘記録と遺跡の整合・不整合に関する検討
- ・個々の遺物偏重の傾向…細かな分類ではなく、兵器の操法や性能を理解する必要
- ・戦闘戦史の視点から全体の構成を考える